法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

社会調査における数量化の問題 : 社会調査 論のための前提的考察

ISHIKAWA, Kiyoshi / 石川, 淳志

(出版者 / Publisher) 法政大学社会学部学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) Society and labour / 社会労働研究 (巻 / Volume) 16 (開始ページ / Start Page) 81 (終了ページ / End Page) 117 (発行年 / Year) 1963-08-20 (URL) https://doi.org/10.15002/00006273

社会調査論のための前提的考察

おびただしい数に上っているのであるが、それとともに社会調査「論」に関してもさまざまな角度から多くの問題 戦後わが国における社会調査の発達はまことに目覚ましいものがあり、調査報告の数もあらゆる領域にわたって 石 Ш 淳 志

終っている。といりのは、それらが単に社会調査の技術・手続きに関するものとしてではなく、科学方法論そのも れにもかかわらず問題はすでに解決ずみであるかのどとく何らの反省も祭わぬ社会調査がいよいよ盛行し、態度・ は社会事象の数量化の問題などは、より基本的な次元から考察されなければならない 性質のものであった。 のとして展開されるべき問題を含むものであったからである。なかでも統計的方法と事例研究法との問題、 にもかかわらず、いや問題が重要であっただけにその解明は困難を極め、いずれも十分には論じ尽しえないままに が提起され、また盛んに論じられてきた。しかし、それらのうちのいくつかは極めて重要な問題を内在させていた だがそ あるい

意識などの領域にまで数量化の範囲は拡大されるにいたり、またその技術はより一層「精緻化」せしめられつつあ

り、 ずれも「実証」ということの意味、さらには 科学力法論そのものに対する謙虚な反省の欠如というべきであろう。 繰り返えせば繰り返えすほど、後者はそれに耳をふさいだ次元で自己の殻にとじこもって 行く。しかしとれらはい け入れれば受け入れるほど、それに対する後者の不信は一層拭い難く固って行く。また後者が大上段からの非難を る。 本的と考えられる問題を概観するにとどめる。したがってまた本論は、社会調査論のための一つの前提的考察とし ての位置づけをもつにすぎず、考え方の方向の大雑把なスケッチを示すだけである。 省な受容とまた無理解な批判との両者に対する疑問を基礎に、数量化自体の展開過程を辿りながら、いくつかの基 との小論はそうした反省を出発点とするものではあるが、ただことでは社会調査における数量化についての無反 他方またそれと対照的に、 この方法のもつ科学としての創造性を妨ける結果をもたらしている。数量化に対して前者が無反省にそれを受 数量化それ自体に対する無理解な批判、 というより非難もまた根強く存在してお

(1)いうまでもなく資本制的商品生産・流通の過程であり、また個人のプロレタリア化を基盤とする過程にほかならな び家族の地縁的・血縁的な伝統的紐帯を切断し、 的生産様式の発達に基いて展開される近代社会は、かつて個人を全人格的に包摂していた封銷的な地域共同体およ 社会現象の数量化を可能にした歴史的条件は、近代社会の成立と展開そのものに求められる。すなわち資本制 個人を直接社会過程の渦中に出現せしめる。その社会過程とは、

い。さらにそれはまた、社会の富の「原基形態」として現象する商品の論理が貫徹し、それが人格をも支配するに たる過程である。

異なる具体的諸形態も消失されて、すべては同等な人間的労働すなわち抽象的・人間的労働に選元されている。商 「量」としての存在にしかすぎなくなる。そこでは商品を生み出した性格はすでに失われ、またそれらの労働の相

交換関係においてその「質」たる使用価値を誇象され、感性的性状をすべて消去されて、ただ相異なる

商品は、

品に現象される労働は同等な人間的労働であり、したがって個人的な諸労働力は、いずれも社会的な平均労働力と しての性格を帯びるのである。かくして個人は、プロレタリア化の過程において抽象的・平均的な社会的単位とし(前1)

て成立するにいたった。

要素に分析し、社会的諸関係を測定しらる量的存在物として生み出したのであり、かくして社会現象の数量的把握(重3) れるにいたる。内容から形式へ、具体から一般への方向は、すべて近代社会における質的・内容的規定性から量的 の成立が可能となるのである。特殊的・具体的な行為および関係が、抽象的・一般的な行為・関係の中に類型化さ はただ量的存在として現象する。またその意味で平均的な単位の成立を俟って、はじめて内容を捨象した形式関係 ・現象的規定性への社会過程として特徴づけるととができる。歴史は近代社会の現实的諸関係を抽象的・普通(#2) 抽象的・平均的単位はその質において平均的であり、質的差異を捨象された存在として成立するがゆえに、それ 的諸

が歴史的にはじめて可能となったのである。

マルクス、資本論、長谷部訳、青木文庫版第一分冊、一一八~一二〇頁

#: 1

量的条件を異にするにしたがって、さまざまの(価値的見地からも)性格を異にした諸現象を生み出すことを説く **量への週元は「生の偉いなる諸頌向の一つ」でもあった)、質的に相異した主観的表象の根底に存する客観的実体そのも** のは、単に私的に相異しているにすぎぬこと、また主観的なものの範囲内においても、それを構成する要素や力の集積が 社会学でこの過程に最も鋭く迫ったのはジンメルであろうが、かれは貨幣の中に近代の量的契機の例証を見出し(質の

八四

Simmel; Philosophie des Geldes, 1900. 傍島訳、貨幣の哲学、五〇二頁)。しかしジンメルの社会学にとって問題であ

社会制査における数量化の問題

1923. S. 21)ということであったのであり、後世の俗流化された皮钼的社会過程の形式的・量化的把握とは遥かに隔っ ということではなくして、要するに主観的精神の客観的形式としての社会はいかにして可能か(G. Sinnel;Soziologie ったのは、社会といり一般的な概念によって構成されるところの経験的に生み出された統一的形像がいかにして可能か、

川島武宜「社会学における計量的方法の意義とその限界」(社会学研究、第一巻第二輯、昭和二二年)

3

ものとかかわらざるをえない。今この問題をくわしく論ずるゆとりはないが、ただ次のことを指摘しておこう。す (2)なわち「数量化」という操作には、それが科学としての技術性を意味する限り、対象の分析的把握の傾面と、 ととで可能となった社会現象の数量化とは、いかなる意味を含むものであるか。それはまさに科学の方法その(ホート)

過程を通じて常に対象の全体像と結びついていなければならない。との二過程が統合されて機能するとき、はじめ て数量化による対象の認識が可能となるのである。 的把握の側面とが統合されて内在していることを意味する。分析的過程で明らかになる要素の一つ一つが、綜合的

「無限に分割しりるもの」としての全体を構成する連続量は、また一方「それ自身分割されているもの」としての さらにまたこの際問題になる「量」そのものも、分析的過程と綜合的過程との統一として把握される。すなわち

単位から成る非連続量であり、そとに連続性と非連続性の二契機の統一としての「量」 を 見 る のである。それが を内在せしめるものとして把握されるのである。(離2) 「数」として把握される場合においても同様、非連続性としての「集合数」と、連続性としての「単位」の二要素

ところで一般に科学とは組織的・統一的=-体系的な認識を目的とするものであり、したがって科学としての方法

方法の内部に包含され、その方法の存立を支えている断片的な科学手段ないし認識手段もまた不可欠とされる。と 論(Methode)の確立には組織的・統一的な方法(Weise) の存在が必須とされるのであるが、しかし一方それらの賭

方法論(Methode)が確立されるのである。 機能を発揮しりる。そしてそれらが組織的・統一的に組み立てられ、一つの体系に統合せしめられてようやく科学 の手段(Mittel)はそれ自身ではまだ科学方法ではなく、具体的な科学方法(Weise)の中に定着されてはじめてその 数量化による対象把握の方法は、社会科学における一つの Mittel である。しかしこの Mittel 目体の内部にも、

が、さらにそれ自体分析的・断片的とされる Mittel を綜合的過程たる Weise の中に統一的に定着して、はじめ の意味での方法論的確立過程を示すものではなかった。 Weise なり Methode なりの問題を意図的にも切り難し て社会科学の方法論(Methode)を確立しうるのである。しかし社会学における数量化の展開過程は、必ずしもど 上述の分析的過程と綜合的過程とが統合されて存在する。この同過程の統一の中に Mittel の存立があるのである

り Methode の樹立にいたるものであるとされてきた。それはまさに「科学の戦術」に終始し、「科学の戦略」を た次元において数量化の展開がはかられたのであり、またむしろ数量化の提示自体が、直ちに Weise の確定であ

忘却した過程であったということができよう。

胜 2 胜 る。前者を計数化、後者を計量化といい、両者を綜括して数量化という。北川敏男、統計学の認識、昭和三二年参照 一般に定性的な標識は非連続的な数およびそれの組合せとして、また定量的な標識は連続的な量の表現として把握され ヘーゲルは「量」において連続性と非連続性の二契機の統一を見るのであるが、その関係は「数」においてその発展と

完全な規定性とに達する「定批」でも同様である。「数は、そのエレメントとして一を持ち、非連続性のモメントからす れば集合数(Anzahl)を、連続性のモメントからすれば単位 (Einheit) を、その質的モメントとして自己のうちに含んで

#: 3 戸坂潤「社会科学における実験と統計」(迸集第二巻、科学裔一六八頁。) る。」(ヘーゲル、小論理学、松村訳、岩波文庫、上三〇八頁)なお大論理学(鈴木訳、上巻、三〇一~五二九頁)参照。

J. D. Bernal; Science in History, 1954. (歴史における科学、鎮目・長野訳、第一巻、二〇~二一頁)

であるが、それはともかくとしてその後の数量化の展開は、主として分析的過程における技術的操作の発達と相俟 的決定論の立場が見られる。かかる意味での統計的法則の定立が可能であるか否かについては論議の分れるところ に存立する全体の自然的法則の規制下にあるとする。いずれもそ と に は社会を個人の算術平均的総和とする捉え(註2) る)必然性を備えた社会的法則が顕現するという。デュルケムが依処した自殺統計などもこの段階のものといえよ(証) (3)方、および全体の平均値の中に個々の人間の意志とは関係なく社会を動かす自然的な法則が現われるという機械論 **ら。すなわちかれは最も個人的な意志によると考えられる自殺さえも、社会全体としてみれば個人の意志とは別個** に相殺されて行き、やがて自然法則に貫かれた力学的体系のどどく(かれの労作は社会物理学の名が冠せられてい 観察対象とする人間の数を増加するにしたがって個人々々では差のある人間の肉体的ならびに精神的諸特性は次第 析的過程よりも、むしろ質的差異を前提にしてその差を相殺・稀釈するために観察対象の数を大にし、そのととに 人」の概念にみるごとく、全体を等質の量として措定しその内部においてきめ細かく数量化をおし進めるといり分 よって一層その技術的展開をみるにいたるのであるが、た と え ば 古典的統計の段階においてはケトレーの『平均 よって逆に全体の特性を包括的に把握するという統合的過程の方が比較的大きな比重を占めていた。ケトレーは、 ところで社会現象の数量化は早くから統計学の分野においておこなわれており、確率論および誤差論の成立に

って、結果処理の方法(分布の型・相関など)に新しい統計解析の途を開いたピアソンなどの記述統計学、さらに

は考察の範囲から排除されている。かくしてピアソンはまさにマツハ主義者として記述統計学を大成した。(#4) とはいうまでもない。しかしたとえば記述学派の場合、観察により把握される現象の反映・模写としての事実を統(#3) 明らかにすべき統計的法則なるものの実質的意味はそれぞれの現象に関する実質的科学によってのみ与えられると 計的に記述するとしても、その際経験数としての統計数字に対応する社会的実体そのものの歴史的・客観的実在性 的実体の綜合的把握はいずれも十分には果されえなかった。もちろん統計的方法は本来記述的性格を持ち、それが 作の精緻化を通じて対象把握をおこなおらとする傾向のみが発達して行ったのであり、その過程からだけでは社会 ツの社会統計学派(マイヤなど)も一方に存在する。だが社会統計学派は暫くおくとしても総じて数量の技術的操 た方向とは対照的に綜合的過程への志向を常に維持して歴史的存在としての社会集団の数量的把握を目指したドイ はそれと対立して標本理論から独自の展開をみるフィッシャーなどの推測統計学へと進んで行く。もちろんそうし

顕著であり、質的規定性の優位が動かし難い地位を占めていたといえよう。いわば社会の根底まで近代的社会過程 固定的 みられ、 状態であった。さらに農民層と賃労働者層との分離が進行するのと同時に、プルジョアジーもまた新しい 意味での 拘束される農民層であって、工業プロレタリアートは徐々に都市に集中し、ようやく階級として形成されつつある 像が提起されてはいたが、現実には都市と農村との分離が進行している過程であり、人口の大多数は伝統的紐帯に 本の成立・発展期に照応するとみることができよう。すなわちとの時期においてはすでに統一的国民市場の形成が ところできわめて大まかないい方をすれば、ケトレーあるいはピアソンなどの数量化が意味する段階は、 「身分」を形成しつつあった。その意味でこの段階においては、 (Ma) また「市民社会」の観念にあらわされる自由・独立の、それゆえにまた原子的・平均的単位としての人間 地域的にも階層的にも生活・思考の差異が

産業資

段として度数分布を基本的概念に置いたのであった。(#6) 的法則の定立がはかられ、対象観察の操作においても大量的社会現象の取扱いが常に問題であったのであり、さら にピアソンの場合においても質的変化たる進化論の数量的確認を目標にして、自然界の事実を要約的に記述する手

が透徹していなかったのである。したがってまた先のケトレーにしてもむしろ質的差異の相殺化という方向で統計

#: 1 間に就いて、平・山村訳、岩波文庫上下) L. A. J. Quetelet; Sur l'homme et le développement de ses facultés, ou essai de physique sociale, 1835. (人

#E E. Durkheim; Le suicide, 1897. (自殺論、鈴木・飛沢訳)

#: 3

レーニン、唯物論と経験批判論(全集第一四巻)。また推計的分析の立場からする記述的分析批判については、北川敏男、 K. Pcarson; The Grammer of Science, 1892 (Every-man's lib. 1949)。なおマッハ主義・記述学派批判については、

是永純弘「統計的合法則性についての一孝察」(経済志林、第三〇巻第四号、昭和三七年)

的推論、渋谷・竹内訳)。 統計学の認識(昭和三三年)、 R. A. Fisher; Statistical Methods and Scientific Inference, 1956. (統計的方法と科学

北川、前掲掛、一二五頁 松下圭一「史的唯物論と大衆社会」(思想、昭和三二年五月号)。

(4)号化はおとなわれていた。しかしとの段階においては数学的操作の一層の展開により、認識主体は「観察値の組合 そのものの操作技術が発達し、たとえば推計・推測といったより抽象的な数学的操作の展開が可能となる。もちろ ん先に述べたごとき数量化の段階においても、対象のある特性に数量を与えることによって、測定過程の分析的記 やがて社会現象の数量化は観察対象の単なる要約的記述段階からさらに一歩進んで、測定における数量的記号

せ」としての尺度化によってより分析化を抑し進めた形態で対象把握をおとなりのである。

のであろう。(註2) 階で標本理論を基礎にした推測統計学が発達してくるのも、箜質化が全社会的規模で拡大したことを背景とするも するのである。このような段階にいたり、よりやく箜質の社会的単位の量的存在を対象として、内容と質とを捨象 した生活・思考・意識の様式的・形態的測定を現実におこないりる構造的条件が具備せられたとみるこ と が あらわされる都市的生活様式・思考様式・意識形態の画一化・平準化が、一つの時代的特徴として全社会的に拡散 せしめるのであるが、それにともない都市的生活様式は広く社会の隅々にまで浸透する。いわゆる都市化の概念に と技術の発達は商品の大量生産を可能にし、 **こうした数量化の技術的展開を可能にした社会的条件は、独占段階の成立と展開に求められる。すなわち生産力** 社会学においてもとの時期に尺度化による社会測定法が具体的に展開されるようになった。またとの段(ホサー) 「そのもっとも広汎な形態にいたるまでの交通」をいちじるしく発達 てき

測統計学の考える集団の性格は純解析的集団でしかも理論的には無限集団であり、もっぱらその数学的方法から導 き出されているだけのものであって社会科学から規定されたものでもなければ社会そのものに対応するものでもな 学から規定されたものであり、そしてさらにその一段深部においては社会そのものに対応している。それに対し推 で集団が存在たる集団であるのは補助学たる統計学そのものの方法が規定したのではなく、 る集団であるとして、 イツ流の社会統計学の立場からは、統計学で取扱う集団は本質的に時空に規定され、歴史性を持った社会的存在た あるところである。この点に関連して統計学における方法論論争には注目する必要があろう。その中でたとえばド 時空の規定を取りはずした方法的・解析的集団を扱う推測統計学を批判する。すなわち前者 その背景にある社会科

ただしとうした数量化の技術的展開が、

より「優れた」方法への進歩と見なしりるかどうかということは問題の

社会調査における数量化の問題

の間に、 が、いずれにしても推測統計学の場合、その取扱う集団の性格として数学的存在たることと経験的存在たることと い、と。もちろん標本理論の技術的側面における有効性は数量化の成果として一概に否定する わけ に は行かない(ホロッ) 認識的な意味からもより明確な理論的運関が設定されていなければなるまい。

同様の意味合いから社会測定における尺度化にも多くの問題が存在する。 特 に そ れが態度・意識の尺度として

は、 たからである。そとでは尺度の「信頼性」のみが問題の中心に据えられ、真の「妥当性」は閑却されざるをえなか 必要があった。けだし分析的過程の緒巧性が、そのまま没価値的な「科学性」の立証とすり代えられる必要があっ いうこともできよう。しかしまたそれゆえにこそ一層抽象的な数学的操作に頼り、「精緻な」測定技術を展開する 「構成」される場合に、問題は一段とむつかしくなる。 い り ま でもなく先に触れたごとき画一化・平準化の現象 独占段階の危機的状況における「大衆操作」の結果として、むしろ意図的に生み出された皮相的幻影であると

てあらわれた最初のものは L. L. Thurstone の等現間窮法であった。 L. L. Thurstone and E. J. Chave; The Meas-(一九二六年)など早くからおこなわれていたが、一応の理論的検討を経たより科学的な装飾(内的一貫性尺度)をとっ 尺度化は C. V. Chapin の評価尺度(都市保健事業について、一九一〇年代)、 E. S. Bogardus の社会的距離尺度

11: 2 推測統計学の内容としては、母集団類型の決定、母集団特性伍の推定、仮説の検定、標本分布などがあげられるが、こ

urement of Attitude, 1929.

誰 3 ついての結論を引き出そうとするところにある。 の理論の特徴は、所与の観察資料をすべて一つの母集団からの無作為抽出による標本と考え、その分析から母集団一般に 大橋隆遼、現代統計思想論、昭和三六年、二四~五頁。

安田三郎「社会測定法の展開」(社会学評論、第二三号、昭和三一年)、「たとい尺度の一次元性が確保されても、それ

4

ての社会学における測定法の「位置づけ」が、より基本的な次元から問題とされなければなるまい。 局常識的判断と、プラグマティックな試行錯誤の過程によってのみ、解決されるものであろう。」ここでは「科学」とし にいう時おのずから限界をあらわさざるをえない。「斯様な、数学的世界の形式と実在世界の内容との対応の問題は、結 が何を測っているのか、測るべきあるものを強かに測っているのか、の問題は依然として残る。」しかし続いて次のよう

数量化の展開は単に対象を尺度化によって測定する段階にとどまらず、対象を自から能動的に形像化して認識

(5)

る。 対象の分析過程による構造化の中から形像化されたもので あり、 さらには諸法則の綜合としての統一的全体像の þ われわれは対象を綜合的形像として捉えることができるといえよう。もちろん尺度化による測定の技術 におい て する実験の段階にまでいたる。対象についての実験の「構想」と、実験による「検証」の段階において、はじめて しかし実験過程におけるモデル 対象の分析的過程としての尺度化と、 綜合的過程と しての測定値の知覚は統一されて測定操作を形成し てい (模型)の正当な意味は、感性と理性の統一における「構想」の産物として、

れは「実験」のもつ思想的意義により一層注目しなければなるまい。 連なるものである。そこでは対象の受動的認識段階から能動的認識段階へいたるともいえよう。その意味でわれわれる。 で果される「検証」の意義は、他ならぬ人間の「能動性」の結果を示すものであり、やがて究極の歴史的行為へと 「認識」へと連なるものである。そしてまた若干飛躍して言えば、かかる意味でのモデルに現実を適合せしめる中 本来、実験的方法は仮説を能動的に検証する手段である。しかしこの方法が単に分析的過程の範囲内にのみとど

階における体制の論理から導かれた「技術」として体制的矛盾の解決を志向し、対象の統制・計画を目指す過程で なる Mittel として思用される誤りを重ねるととになる。との意味における社会科学の実験的方法は、当初独占段 まり、綜合的過程への志向を断ち切った次元で云々されている限り、その思想的意義もまた自覚されず、

却って単

1.3

医学などの影響を受けながら第一次大戦後との方法が次第に発達するが、なかでも注目すべきはホーソン工場の実 適用さ れ はじ めたものである。そして事実その意図通り体制に奉仕する役割を果してきた。たとえば計量経済学 (エコノメトリックス) は、大恐慌後ニューディールの時期を経て急速に発達する。社会学の分野においても精神(H2)

験を行ったメーヨー等産業社会学におけるハーヴァード学派の研究と、ソシオメトリー理論を確立したモレノの研

を志向したことは、イデオロギー上当然であるとはいえ、実験的方法そのものの堕落であった。 外部観察者の立場に終始し、またそれ以後の産業社会学の多くが労資協調による生産性向上という方向で問題解決 の暗黒面」として捉え、その解決を目指すととろにあったことはあまりにも有名である。しかしメーコの暗黒面」として捉え、その解決を目指すととろにあったことはありにも有名である。(世話) 兜であろう。メーコーの問題意識が、 technical skill と social skill の発達のズレによって生じた諸問題を「現代 1等が結局

を説く。ソシオメトリーの出現は、たしかにそれ自体集団成員の心理的属性に関する数学的研究、および数量化に(誰!) よる自然科学的方法の導入から成る実験的諸技術、さらにそれらの応用によってえられた諧成果の統合を意味する これに対しモレノは、マルクス主義との対応において自己の問題を設定するのではあるが、**実践者としての実験**

とができる。(註6) で、いわゆる些末な「検証」のみを第一義とするごとき似疑客観的方法とは異なった「発見的方法」とさえいりこ ものであるが、従来の社会学的実験と異なり、被験者自身、(165) 自己の 行為およびその状況に対する観察者となる点

局体制内的· 法が主として対象を「閉鎖系」においてのみ取扱い、真に社会科学としての「開放系」において対象を捉えようと しかし本来プラグマティックな志向を示し、 人間関係の調整という点でのみ有効性を示すものとならざるをえなかった。それは、 集団統制から社会統制への途を開いて行ったソシオメトリーは、結 **とれらの実験的方**

しなかったととからみても、当然辿るべき途すじであったといえよう。なお実験的方法は、第二次大戦中軍事科学しなかったととからみても、当然辿るべき途すじであったという。

としてのオペレーショナル・リサーチの発達をもたらし、戦後一層「支配の技術」としての展開をみている。(#8)

て成立する実験が、本来科学の Mittel の範囲内にのみ止まるものであるかどうかは暫くおくとしても、ここで綜 れ自体対象の綜合的「形像化」への契機を内包するものと考えられるからである。数量化をおし進めるととによっ 的過程は全体認識のためにこそおこなわれるべき過程であり、またそこで果される対象の分析的「構造化」は、そ れわれはそれ自体に内包されるプラスの要案は十分に認識すべきであろり。すなわち、実験的方法を構成する分析 だがこのように体制の論理に組み込まれることによってその機能を展開してきている実験的方法ではあるが、わ

行為としての大いなる「実験」を意味するものだからである。 (its) きではない。社会の自然史的発展過程の中に生きるわれわれにとって、到達すべき社会の綜合的形像化は、歴史的 合的形像を生み出す「構想」と綜合形像化へいたる能動的検証とに示される実験の問題性は、決して看過されるべ

「観察が自然に耳をかたむけ、現象を凝視する客観的態度をとるに対し、実験は自然をある状況に追い込み、これにあ

誰 1

本多修郎他自然科学概論、昭三七年参照

事実をありのままに見ようとする消極的な態度に終始するのに対し、実験においては対象に能動的に働きかける積極的な **る構造を強いて、これを自からの本質と認めさせる攻げき的性格をもっている」(五一頁)** なわこの意味で自然科学におけるベルナールの先駆的役割も忘れてはなるまい。ベルナールは、解察がただ与えられた

繁茂し、立派な実を結ぶような条件を与ふるところの土壌である。併しながら其処へ播いた種だけが土壌から発芽すると そしてかかる実験を導く構想については「構想!それは種子である。力法!それは此の種子が其の性質に従って成長し、 de la médicine expérimentale, 1865. 实験医学序説、三浦訳、岩波文庫、三六~四六頁)。 態度が必要であって、結局「実験は惹起された観察」に他ならないという。(Claude Bernard, Introduction à l'étude

でも空想的なものでもなく、「寧ろ常に観察せられたる現実、即ち自然の中に足場を持ってゐなければたらぬ。一言にし 同様に、実験に置かれた構想のみが実験的方法から成長する」とするのであるが、しかし実験的構想は決して勝手なもの

て云えば、実験的仮定は常に以前の観察に悲いてゐなければならぬ」と説く(六三~六五頁)。

註.2 法の利用において、それが計量経済学的方法の技術体系であるとするよりもそれ自体経済理論であると見なされるまでに 基調とするものにせよ、確率論を基調とするものにせよ、あるいは公理主義的方法に基くものにせよ、いずれも数学的方 いたっている。(是丞純弘「経済学における数学的方法の利用について」思想、昭和三四年四月号。 L. R. Klein; A しかし経済模型論を中心とする計量経済学の展開は、むしろ第二次大戦後のことに属する。そしてそこでは均衡理論を

計: 3 E. Mayo; The Human Problems of an Industrial Civilization, 1933.

Textbook of Econometrics, 1953. 宫沢・中村訳、計量計済学。柴山幸治、計量経済学、昭和三七年、参照。)

註 4 of Society, 1951 J. L. Moreno; Who Shall Survive? 1934. (1953 rev, ed.). Sociometry, Experimental Method and the Science

盐四 Moreno; Who Shall Survive? ibid. p. 51

Moreno; Sociometry, ibid pp. 37~42

ili 6

立させて扱うことを意味する。これに対し開放系としての対象把握は、歴史の流れにおける文脈を重視し、全体的た型を 実験的方法において閉鎖系として社会現象を取扱うというのは、歴史的な時間・空間の中から、ある現象を切取って孤

木社会学の課題」所収、昭三一年) 尊重するものである。西田春彦「社会調査における実験計画の若干の前提的問題について」(林教授選歴記念論文集「日

莊 8 Experimental Sociology, 1945. 青井和夫「社会学と実験」(社会学評論、二一、二二号、昭二五年)参照 実験的方法に関する概括的説明は、F. S. Chapin; Experimental Design in Social Research, 1947. E. Greenwood;

胜9 これと関連してグラムシのいう「実験」ならびに「実験家」の問題もあらためて考えられなければなるまい。

求においても自然科学の方法によって自然的法則を求めよ う と する社会科学の自然科学化という風潮を生み出し によって哲学的基礎づけを与えられたとされるニュートン物理学の科学性は他の諸科学の範となり、社会現象の深 れを見ることができる。近代市民社会の成立は近代諮科学の急速な展開をもたらしたが、なかでもカントの認識論 (1)いりまでもなく社会学において厳密科学としての自然科学化を目指す動きは、すでにコントの実証主義においてこ コントの央証主義はとうした情勢の中から生まれたものであった。 社会現象の数量化が展開される過程は、 社会科学が厳密科学としての確立を志向する過程と軌を一にしている。

た

ŋ て複雑多様であり変化に富むため、数学的法則を受け入れ難いかもしれない。 し か し ながら哲学上の議論として 抗議する人があろうとも、質に関するすべての観念は量の観念に選元されることを 証 はない、と断言されるのである、たとえカントの質と量との二つの範畴にしたがって人間の観念には区分があると したがって相互の量を決定する事に還元され、したがって最後まで分析すれば純粋な数の問題に帰せられないもの 正しい観念をうるととができる、とされる。とのように考えるコントにとっては、如何なる問題も何等かの関係に 現象の賭法則の探求に用いらる最も強力な道具であり、ただ数学の研究によってのみ科学とは何か、 学・社会学(社会物理学)の五科学に分れ、しかもすべての基礎として数学が置かれる。数学は、人間精神が自然 か かかる抗議は無用であると斥ける。そしてさらに次のようにいう。確かに生物現象や社会現象は、 れの説く実証哲学は、単純性(simplicité)と普遍性(generalité) の到達度から天文学・物理学・化学・生物 明し たデカルトの立場を採 ということの 数的に極め

は、あらゆる種類の現象を、数学的法則にしたがうものとして理解しなければならない。ただ多くの場合、それら に複雑な現象も、 の現象があまりにも複雑なため、われわれがその数学的法則を知りえないというだけである。実際、生物体の非常 無 生 物 の極めて簡単な現象と本質的に異なった性質のものであると考えるべき理由は少しもな

して顕現するのである。その意味で実証性の六特性も、形而上学と決別した社会物理学の自然科学化への実証的稍 かれにとって現象の同質化→数量化はすなわち実証化であり、その観点から現象は数学的思惟に貫かれたものと

神のあらわれであった。(肌)

程 ら始まった。すなわちランドバーグは、①社会現象は自然法則にしたがうものである、②人間を取り扱う科学と他 |の中にとり入れられた時、科学方法論として自然科学の厳密性を志向する動きは、まず新実証主義の問題提起か ところで「数量」操作における分析的過程が一歩進展した時、すなわち具体的に社会測定が社会調査の現実的日

を持つ場合においてのみ科学的に究明することができる、として社会学の自然科学化を提唱した。 (註3) の現象を取り扱う科学との間には相違はない、③社会現象の主観的側面は、それを客観的に明白に表示しうる基盤

化しりる構造的条件を与えられて、ふたたびより具体的な形で復活したのである。社会科学と自然科学との異質性化しりる構造的条件を与えられて、ふたたびより具体的な形で復活したのである。社会科学と自然科学との異質性 異なるとすれば、科学とは結局対象そのものの中に含まれているといわなければなるまい。しかし科学が本来「方 を説き、物理科学的方法の適用に反対する論者に対し、ランドバーグは次のようにいう。①対象の差異により方法も かつてコントの実証主義により提起された社会学の自然科学化が、今独占段階にいたり、具体的に数量化の現実

法」である限り、対象の差異により異なる方法を適用することは誤りである。②社会現象および人間集団行動の複

性ではなく、 があるが、量的・可測的・客観的・複合的・同質的という言葉は、科学が進歩し続ける限り、データに本有的な特 **資弱であるからにほかならない。⑤社会現象のある種のデータは、本質的・主観的で計量不可能であるという論者** 見えるのはそのよりな人間行動あるいは集団に作用している刺戟と反応の性質について、現在のわれわれの知識が を通ぜずには、 雑性が理由であるとすれば、それは理解の不足である。現象のいかなる状況・行動も、われわれがそれを理解でき 「感覚」によるのに対し、社会現象は記号的にのみ知られるとするが、われわれは記号的行動のメカニズムの操作 |複雑性は、常に所与の行動に関するわれわれの理解あるいは精通と相対的である。 ③物理現象が、 反応の伝達のある仕方に対する名称とみなされなくてはならない。(証5) いずれの知識をも持つととはできない。④人間的行動は、一見予測不可能のように見えるが、そう 直接

り一層「科学としての厳密性」を備え、それだけにまた「有効な」 数 量 化 の技術が展開されることになるのであ ての操作主義まで生み出すにいたった。そしてさらに、リンドの警告がプラグマティックな方向に歪曲されて、よ(誰6) る。綜合的過程をないがしろにして分析的過程の精緻さのみが競われ、危険な数学的操作の独り歩きが始まったの との論旨の誤りを指摘することは簡単であるが、しかし現実にこの傾向は広くゆき渡り、その最も極端な形とし

である。

准 1

るフランス唯物論者たちの後で、古いニュートン・リンネ派の金 自 然 科 学を百科全書的に総括しようとの要求が現われ た。そして最も天才的な二人の人間がこれに着手した。サン・シモン(完成はしなかった)とヘーゲルとが。」(エンゲル A. Comte; Discours sur l'esprit positive, 1909. (実証的精神論、田辺訳、岩波文庫。) しかし、とのようなコントの思想に先行するものがサン・シモンであったことはいうまでもない。「概して機械論であ Comte; Cours de philosophie positive, 1830. (実証哲学、石川訳、上、三三~三九頁。)

社会調査における数量化の問題

材と教科課程をただ配列しただけであり、その結果「根本的には正しい思想もばかばかしいものにまで数学的に誇張され ているところの狂気じみた全成教育」を作り上げたのであった。(同一二八頁) ス、自然の弁証法、田辺訳、岩波文庫下巻、一二七頁)そしてコントは、サン・シモンの仕事の継続として自然科学の教

う。なお、本田喜代治、コント研究―その生涯と学説、昭和二四年参照。 このような位置づけと限界を認識した上で、もら一度その後の社会学の発展の上に与えたコントの影響を考えたいと思

11E 3 G. A. Lundberg; "Contemporary Positivism in Sociology" (A. S. R. 4. Feb. 1939, pp. 42~55)

#E 4 思想史としてパナール前掲書。本多修郎、自然科学思想史、昭和三四年。岡邦雄、自然科学史続論上下、昭和二八年、参照。 従来の科学方法論を反省し、改めて形而上学に対する斗争を推進する中から生れてきたものであった。なお概括的な科学 **掛的に綜括・再絧しようとしたものであった。それに対しマッハなどの新実証主義は、機械論的自然観の崩壊後、物理学** ・生物学など自然科学の急速の進歩にもかかわらず諸事実の統一的説明を行いえない状況を見て、それを克服するために 思想史の流れからいえばサン・シモンの意図を受け継いだコントの実証主義は、デカルトなどの機械的自然観を百科全 なお社会学における新実証主義の最初のまとまった著作としては Lundberg; Foundation of Sociology, 1939

Sociology (2nd, ed, 1953, pp. 5~34, pp. 133~150) G. A. Lundberg; Social Research, 1928. (福武・安田訳、社会調査、一七~二八頁)、 Lundberg; Foundation of

ものではない。概念とは、操作の対応物と同義である。……命題の意義はその検証性にある。」(p. 5) 作と同じであり、それ以上の何物をも意味しない。一般的にわれわれは概念によって一連の操作以上の何物をも意味する (A. J. S. 47. Mar. 1942)、参照。 P. W. Bridgeman; The Logic of Modern Physics, 1928. 「長さの概念は、それによっ長てきが決定される一組の操 松森 Lundberg; Foundation of Sociology, ibid, pp. 58~61; "Operational Definitions in the Social Sciences"

註7 R. S. Lynd; Knowledge for What?—The Place of Social Science in American Culture, 1939.

化された) 条件のもとにおいて、 のみ適用しらるという事実にある。」 (p. 32) なおリンドはこの書で次のように説く。 ①社会調査の問題は、一般的な社会的有用性の規準によって決定されるのではなく、学者の研究の既存の枠の要求によっ 「現在の社会科学の弱さの一つは、多くの理論構造が、『競して』、『同質の他のもの』、『与えられた(人工的に単純

献身している「学者」グループの好奇心を満足させるためでなく、人びとの「基本的要求」に対してかかわりを持たなけ ればならぬ。③社会科学者は、分析し、結論を引き出すだけでなく、「行動する」ように努めなければならぬ、 て決定される実状にある。②社会調査は、調査者の単純な好奇心を演足させるため、あるいは「知識それ自体のため」に

これと真向から対立する意見としては Fundberg: "Contemporary Positivism in Sociology" ibid

探求は、すべての社会的行動の最大の基盤であると主張する。J(p. 54) 明らかにここでは「科学」と「行動」の既念が、 「実証主義者は、科学の探求と社会的行動との間の、いつわりの二分法を許すものではない。反対にわれわれは、科学の

全く異なった文脈で解釈されている。

以前の段階」を脱却するため、急速に自然科学化・数量化の途を歩んできた。しかし社会学における数量的方法が(mt) (2) 一九二〇年代によりやく「社会調査の時期」に入ったといわれるアメリカ社会学は、それ以降「パストウール

曲 **な信仰は、やがて超歴史的次元における「完全な社会体制」という把握を生み出す。そこでは歴史の進行そのもの** はなく、旧い社会に対する価値的意味における新しさであった。との新しい価値を備えた新しい社会が、個人の自 さ」と、それへのオプティミスティックな信仰である。しかもその新しさは、単なる時間的意味における新しさで ていたことは、アメリカの社会的・女化的特質によるものである。 そ れ は 一口にいえば、アメリカ社会の「新し 特にアメリカにおいて著しく発達したこと、またその基盤として幻想であろうとも画一化・平準化が高度に進展し ・平等を約束する筈のものであったことはいりまでもない。価値的新社会に対する無限のオプティミスティック

の間には緊密な連絡が存在する。かくして最も若いアメリカが、その社会体制においては最も古く、最も過去と密 社会調査における数量化の問題

る。そもそも打倒すべき封建体制を内部に持たなかったアメリカは、「その伝統のゆえに新勢力を烈しく否定した(ホピン) が、歴史の出発点において存在した体制へ如何にコンフォームしているか、 とい ら 形で捉えられるようにさえな

あるいは新勢力たるがゆえにその伝統を否定しなければならなかったことはなかった」のであり、

り、

過去と現在

接するのである。(註3)

結びつくことが可能である。そこには予定調和の思想に支えられた「明かるい」社会の存在が見られる。 完全な社会体制は、個人の自由と平等を保障するものとして統一を保ち、少くともそこで個人は矛盾なく全体と

対して常に効果的な解決へと進むことが可能である。」(能5) 均等の思想 済的障害、教育的差別、偏見による民族的僧悪などにもかかわらず、アメリカ的生活の支配的感情として存続した の上に固く立ち、更にその所産を広汎に国民生活の全域にわたって利用することによって、人間は困難と問題とに **らオプティミスティックなしかも現実主義的な確信があった。「それは無限に人間の能力と行動の自由を確信し、** みに圧せられることなく社会を個人的・心理的次元に解消することによって社会そのものの姿を解明しりる、とい 報酬を寛容に与える機会の体系(system of opportunity)があった。またそとにはアメリカの将来に関するオプテ 人間の進歩を聊かも疑わぬオプティミズムの香気を湛へる明かるい人間の自覚であった。近代科学が獲得した成果 ィミスティックな展望と、思想や価値をその結果で判断する現象についての強靭な確信があった。結局そこには経 「そとには若い人びとのエネルギーにはけ口を与え、また労働に機会を、熱情に通路を、才能に刺戟を、 (idea of equality) があったのである。」 したがってその限りにおいて人びとには、(註4) 社会的実体の重 能力に

く歴史に対する感覚の欠如とともに、社会的実体の感覚もまたほとんど現実の感覚として一般化するまでにはいた 理的次元に解消し尽しえない社会的実体の存在を考えさせるものである。しかしアメリカそおいては、 の平面とは別個に社会現象の平面の存在することを示唆するように思われる。そしてまたそのことは、 たしかに、社会現象の数量化が発達し、社会調査においてもそれが優位を占めているという事実は、 個人的現象 先述のごと 個人的・心

平面的次元における機能過程こそ歴史過程であるとして把握される。ここに個々の具体的問題は、 っていなかった。しかも超歴史的に把握された完全な社会体制においては、その完全性のゆえに、それの空間的(tte) それぞれ個別的

に、完全な社会体制を維持・確保する形で「技術的」解決の手に委ねられる方向が生ずる。(たとえばメーヨ

問題意識を見よ。)

して行ったのである。(誰?) 値判断も)の画一化が、より一層増幅されて作用し、問題解決の「技術」としての数量化が、まことに顕著に発達 かくして、本来社会的実体の感覚を欠き、歴史の法則に無関心であった土壌において、生活様式・思考様式

註 3 註 я Н Max Lerner; America As a Civilization, 1957, pp. 39~41. 斉藤真「アメリカにおけるコンフォミティの史的背景」(思想、昭和三六年一一月) Park and E. W. Burgess; Introduction to the Science of Sociology, 1921, p. 44.

胜4 ibid. p. 48.

註6 清水幾太郎、社会学構義、昭和二五年、一四二~一四四頁。註5 阿部行蔵、アメリカ精神の形成、昭和二二年、一二四頁。

たがって後者においては、論理として自由に構成された集団であるだけに、その構成要素たる個体に分解することもまた すなわち前者は、実体としての存在的集団を基礎とし、後者は、数理的に推測・構成された解析的集団を基礎とする。し 容易に行われらるのである。 なおこらした意味からも、統計学における対象認識のドイツ的方法とアメリカ的方法の差異が生ずるように思われる。

註 7 学的・文化人類学的分析という)、 結局「アメリカの秘密とは何か」という概括的なアメリカ研究が、いずれもすべてを の The American Democracy とラーナーの前掲書とを比較しながら(前者のマルクス主義的分析に対して後者は社会 もっともここで述べたような歴史的・文化的特質からする概括的把握には問題があろう。たとえばD・ベルは、 ラスキ

の内に入る問題を問うことであり、また経験との照合を通じてのみ整序された一般化を行いうるところの問題を問うこと えばラスキ流の分析を否定する意味合いから提示されるその問題性をも解明しなければなるまい。 と調査」ないし「検証」の問題として検討に価しよう。さらにここにいわれている「経験との照合」ということが、たと なのである。」(D. Bell; The End of Ideology, 1960. pp 91~92) だがこのような問題提起自体すでに一つの「理論

解明し尽すことはできなかったと批判し、より「実証的な」研究の必要を説いて次のように述べる。「アメリカにおいて

その性格の特殊形態や諸制度が何故にまた如何にして生じたかと問うことは、ロバート・マートンが中範囲と称したもの

識の公式では解きえず、またそとで解とうとされているものとは種類の異なった課題である。とする考え方を受け (3)もの、すなわち体験的に認識されていないものだけを測定しりるのであり、内面的なものあるいは意識状態など、 る。幸福や苦痛のどとく、計測することはできなくとも、その意味は明らかなものもある。極言すれば、外面的な 継ぎ、マッキーバーは次のように述べる。すなわち、測定可能ということと認識可能ということとは別の問題であ 科学では精神的な現象の協働が問題であり、それらを追体験しながら「理解する」ととは、もちろん精密な自然認 の批判があるが、同様の立場から社会学における新実証主義への批判も展開されたのである。ウェーバーの、社会 系統に属する人びとであった。すでに実証主義(記述学派)に対しては新カント派(西南学派)およびウェーパー(ffr) 新寒証主義者の主張する社会科学の自然科学化に反対したのは、マッキーバー、ソローキンなど理解社会学の

らない。だが、これらのどれ一つとして測定できる筈はない。われわれは、それらの社会的な意義を評価すること 諸関係を決定化する動機および心的目的、これらの諸関係に依存する生活内容と行為の諸様式を取扱わなければな り、また経験しうるのはただ質だけである。しかるに社会の研究においては、意識的な存在者の諸関係、これらの

定の単位によっては計量しえないものだけを体験的に認識しりるのである。つまり、測定できるのは量だけであ

する社会学の中に、 数学を無批判に導入することは間違いであろ う。 数学は、 主題の最も抽象的なものを取り扱 はできるが、計測することはできない。とのように、物理科学では問題にならない内在的な意志を基本的に対象と 社会学は最も具体的なものを取り扱う。つまり前者は単なる存在の究極的な諧形式を、後者は実在の根本的な

るが、しかし社会的事実の本性を明らかにするには、全く不十分なのである。 (£4) ものを取り扱うのである。量的関係は、他のすべての事実に関してと同様、社会的事実を理解する手がかりにはな 理解社会学的立場からの主張には、多くの正当なものが含まれていた。ととにそれが新央証主義の全く無理解な

「囚果性」の否定などに向けられる時、その正当性を認めないわけには行かない。(fig.) (fig.)

態を生起せしめ、またある現象を産出せしめる能動的な力の実体である、などと考えることは誤りであろう。あら 感覚的知覚あるいはとれら路経験の帰納的一般化というわれわれの「知的操作」のみによって把握されるものでは 中に存在する限に見えない鎖であるかのどとく考えることを意味するものではない。因果関係ないし因果法則 ゆる存在が自然史的発展過程の中に位置づけられるということは、決して因果法則ないし事象の因果性が、自然の たしかに、 さらにとれに加えて論理的演繹という操作を通じて把握される事象間の関係である。(誰?) 科学の具体的な賭法則のほかに、最も基本的な法則として因果法則なるものが存在し、 それがある事

ぱ だ ることを考えると、少くとも論理的演繹関係として 囚 果 性 を捉えておくことには大きな意味があろう。なぜなら 遂に新実証主義的見地を説伏し切ることはできず、依然としてドッド流の単純な相関関係論が優位を保ってい 因果性の認識は、 人間の論理的思考の恣意的産物ではなく、事物の内在的本性として、自然史的発展過程との

いうまでもなく、このような言い方には多くの危険が伴う。しかし賭法則の究極的源泉としての凶果法則央在論

「対応関係」を設定するところに生ずるものと考えられるからである。

にしても新央証主義者がラッセルの段階から出発し、むしろそれを積極的に押し進めることによって事象の確定を(離2) 目指したのに対して、これは大きな違いである。だがしかし先述のごとき端兵急な数量化論者に対しては「テスト して、質的世界へ閉じ籠ろちとするととは、ヘーゲル以前への後退でしかない。同じ抽象的・形式的関係を認める(誰)) かった。数的記号および数学的操作を単なる抽象的・形式的関係として捉え、その無思想性・無概念性のみを主張 て、前者は科学の対象領域および方法の質的差異を説くことに急なあまり、数学的方法の能動的創造性を認めえな の厳密性を志向する点において分析的過程の精密なることを望み、数学的操作の展開という方向に進んだのに対し る数量化批判とだけは極め付けえないものがあった。 ・マニア」、「クオントフレニア」という批判も当然首肯しうる点が多く、一概によりプリミティヴな段階からす(前門) ところで理解社会学の系統に属する人びとの主張は、それにしても後退であった。新実証主義者が、科学として

誑的哲学或は実証主義と呼ぶ。」 W. Windelband; Einleitung in die Philosophie, 1920. 哲学概論、速水他訳、岩波 てよいとする学説、所与を超えて何か。真に実存するもの。 を獲んと努力するは妄想であり病的であると説く学説、を実 問の綜括に基く学説、即ち凡ての思惟凡ての知は、ただ事実上与えられたるものをのみ対象となすことが出来、またなし 定すること以外になさんことを思わず、またなすべしとも思わぬ学問を一般に実証的学問と呼び、最後に諸々の実証的学 れたものに安んずることを以って凡ゆる知慧の最高原理と見る」実証的な考え方を否定し次のように述べる。「事実を確 Procedures, and Techniques in Sociology", in H. Becker and A. Boskoff; Modern Sociological Theory, 1957. p. 196) Hughes, Loomis, MacIver, Merton, Parsons, Redfield, Sorokin, Becker, Znaniecki (J. C. McKinney;" Methodology, ヴィンデルバントは、現象する実在の背後に真実在を探求することが哲学の常に変らざる動機であるとして、「与えら マッキネイによれば、アメリカにおける理解社会学の系統として、次のような人びとの名があげられている。Blumer,

交屏上卷,四三百

を受けた特殊的事象を、その一回起的な個性的連関において捉える「事件科学」とを分けたことは周知の通りである。前 isch) な科学である、とする。(W. Windelband; Geschichte und Naturwissenschaft, 1894. 歴史と自然科学、篠田 者は普遍的な自然法則により個別的現象を説明する自然科学であり、「法則定立的」(nomothetisch)な科学である。そ れに対して後者は、歴史においてただ一回だけ生じた個性的な連関を記述する歴史科学であり、「個性記述的」 (idiograph-なおかれが、実在の認識において、反覆して生起する不変的形式を自然法則として捉える「法則科学」と、歴史的規定

を対立せしめようと思うのである。」(H. Rickert; Kluturwissenschaft und Naturwissenschaft, 1898. 文化科学と自 性的なものに著限して考察するときは歴史となる、と。それに応じて私は自然科学の一般化的手続に歴史の個性化的手続 然科学、佐竹・豊川訳、岩波文庫、一〇一頁) 「個性化」するとした。「現実は、もし我々がそれを普遍的なものに著眼して考察するときは自然となり、特殊にして個 リッケルトもまたこの考えを進め、自然科学が新聞の現実を「普遍化」 するのに対して、 文化科学は同じその現実を

究はただ普遍の論理的価値をのみ眼中に置き、いつも自らを没価値的世界観と呼び得るものと信じている。](ヴィンデル 現として解するところに自然科学との違いがあるという。「歴史科学は帯価値的認識を意味するが、とれに反して自然探 バント、前掲書、二六二頁) また、歴史・文化科学は、現実をそれが持つ意味や価値に関係させて研究するものであり、史的生活の関連を価値の実

策の認識の客観性」出口訳、河出世界教養思想全集、七七頁) M. Weber; Die Objetivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1904. (「社会科学・社会政

を形作り、生起した事物の一般的規則(generelle Regeln)を究明するものである。 それは、個々の、文化的に重要な行思念された意味から理解される「法則」を追求するのが社会学であるとし、次のように述べる。「社会学は……類型概念 為・形象・人格の因果的分析およびその帰属を追求する歴史学に対立するものである。」(M. Weber; Methodische には反対し、むしろ法則を定立する普遍化的な科学としての社会学を説く。たとえば、行為者の類型的な動機、類型的に ただしウェーバーは、後に理解社会学に関する論述において、個々の事象の因果的分析をおこなら科学としての社会学

派の科学方法商聆争を併せて考えなければならないが、それらは別の機会にゆずるとして、とにかくウェーバーにあって - いう。科学における没価値性は、かかる意味からも必然的帰結であった。この問題については歴史学派とオーストリア学 念が歴史的なものの具体的現実性とは反対に相対的に無内容でなければならない、ということを前提とする」(s. 521) と Grundlagen der Soziologie, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, s.520) したがってまた「すべ の過程から生まれてきたと考えてよかろう。 ての봠脳化的科学 (generalisierenden Wissenschaft) の場合におけるごとく、その(社会学の)抽象の特色は、その概 「法則」および「客観性」の概念の、より厳密な検討が加えられていることを知る。「理念型」の概念も、この検討

R. M. MacIver; The Element of Social Science, 1921-9th. ed. 1949, pp. 12~18.

il: 5 Neurath; Foundation of Social Sciences, 1944. pp. 20 - 22)、コンフォースはこれに対して徹底的な批判を加えている。 pp. 822~823)。 またノイラートも簡理実施主義の立場で因果性の基準(frame of reference)を批判しているが、(O. p. 260)、ドッドは、因果性に代るに相関係をもってすべしと主張する。 (S. C. Dodd; Dimensions of Society, 1942, ……そして、社会の基礎、矛盾、 発展の法則の究明でなく、 皮相的な現象の研究に従事している。」 (M. Comforth 「ブルジョア社会学は、論理実証主義の意味論が、 今しなければならぬといっていることを、 常に正確に行ってきた。 たとえばランドバーグは、因果性の概念を、アニミズム的・神学的観点ときめつけ(Foundation of Sociology, ibid.

証7 沢田允茂「社会科学と法則性の問題」(思想、昭三七年二月号、四頁)班6 たとえば R. M. MacIver; Social Causation, 1942.

Science versus Idealism, 1955, p. 320)

註8:ヘーゲル、大粭理学、前掲。同、小輪理学、 前掲。 なお、 吉田奺「ヘーゲルの数学観」(唯物論研究、 昭八年一〇月

被的適用には、認識論的思考、長期にわたる調練、確固たる科学的背景、あるいは天才的閃き、などを必要としない。そ のため、今日のどとき無思慮な統計調査の流行をみているのである。」(p. 172) P. A. Sorokin; Fads, and Foibles in Modern Sociology and Related Sciences,1956「数量化熱的な統計操作の機 B. Russell; Introduction to Mathematical Philosophy, 1920. 数理哲学序說、平野訳、岩波文庫

th. る。とのように最も広い意味で社会現象は、 あるが測定を行っている。たとえば、成長、増加、多い、少ないなどの言葉は、 かに何が洞定されるべきかを決定する理論である。②調査の最も完全な質的方法といっても、限定された意味では を润定することの中で信頼性と精密性を達成するものである。数量的方法にとって絶対必要なパートナーは、 「算えられ」ているのである。③理論的に諸単位にまとめられたデータを数量的に取り扱 う こ と が望まし 理論 家 によっても数量化を主張する社会調査者によっても「測定さ 「潜在的」数量化を示すものであ

続性があるとして、数量的方法の論理的位置づけを行った。すなわち、◐数量的方法は、「理論的に意味ある質」

明ら

進めたのに対して、自然科学と社会科学との間の論理的連続性を認めるのはマルクス主義である。もちろん、とと 実証主義と新カント派、新実証主義と理解社会学のいずれも自然科学と社会科学との間の断絶を前提として論を は単に説明を「示唆する」だけである。(註2)

るデータの認識を伴うかぎり、合理的である。⑤統計は、仮説の適合性ないし不適合性をあらわすが、しかしそれ い、といりことは、一般に認められている。④主観的現象の測定は、それが客観的指標によって間接的に形作られ

いり中間派がマルクス主義と関係をもつものでないととはいりまでもない。かれらは、いわゆる経験科学を志向

社会調査における数量化の問題

一〇七

ざるをえなかった。だが妥当性への反省は、測定の「文脈」へ眼を向けさせるにいたる。もちろんそれがプラグマ ティックな妥当性という女脈の中で検討される限りにおいては、何らの「進歩」もありえないが、歴史的・社会的(誰4) その妥当性も、 めて模索する中から、いくつかの重要な指摘がなされるにいたった。その一つは「妥当性」の検討である。しかし(酢る) する「中間」派にしか過ぎない。しかし極端な操作主義と直観主義のいずれからも生まれえない真の実証科学を求 結局は決め手を見出せないままに、 「妥当性検定の信頼度」が問題とされるごとき肠道にしか進ま

に多くの現代の社会学者は、マルクス主義者のアプローチを排除する場合、この事実を認識していない。といりの 定要囚であると見なされている。したがってマルクスは、階級の説明に経済的要囚を迸び出したのである。しかる を中心とする社会変動、つまり歴史発展の道程の解明であった。そこでは、生産力と生産関係との矛盾が変動の決 れらはマルクスの階級概念を経済一元論であるとして否定するが、マルクスにとって問題であったのは、階級斗争 たとえばリプセットとペンディクスは、ウォーナーやセンタースの階級・階層論を批判し次のように述べる。 か

文脈の中に測定を位置づけようとする限り、少くとも従来の論者よりは一歩の前進を認めることができよう。

学の階級論は、何よりもまず社会変動の分析という文脈をもって始めるべきである。 (註5) 事は、この近年いちじるしく自信を失ってきている」という状況が語られ、また数量的方法を原理的に受け入れ積 内部にその影響力を浸透させるまでにはいたっていない。しかし「アメリカおよびヨトロッパ諸国での社会学の仕 は、社会階級に関するかれらの関心は、もはや社会変動の理論に基礎を置いていないからである。したがって社会 数量的方法における分析的過程の進化と同時に綜合的過程の確立を目指そうとするこれらの論者は、まだ社会学

極的にその適用を行ってきた人たちでさえも、今や社会学における測定の概念に再吟味を加える必要をますます意

る「抽象化された経験論」を正しく否定した基礎の上に「曲げることのできない」事実から出発した新しい科学が(誰?) 識しつつあるとされる時、やがてとれらの傾向の中から新しい方法が生み出されるであろうことは、期待してよい(tes) であろう。そしてそれらの成果が積み重ねられて行く過程で、計算を思考の代りとし、資料集めを分析の代りとす

確立されるに違いあるまい。

Hughes, Parsons, Wirth などがあげられる。(J. C. McKinney, ibid, pp. 202~203) 第一の系列としては Ogbern, Drothy Thomas, Thurstone, Stouffer など、第二の系列としては Becker, Blumer,

ii∾ McKinney, ibid, pp. 203~204

まっているが、少くとも他の方法の一つ位とは結びつけられなければならない (pp. 237~239)。 独立的基準。このうち第四のものが最も理想的だが、それだけに一番むつかしい。一般的に第一のものだけで済ませてし 度のわかっている正反二つのグループの態度・行動に照準せしめる妥当性、①上のいずれにもよらない妥当性そのものの ①常識的な定義に照して判断される論理的妥当性、②エキスパートによる妥当性評価、③ある態度尺度に対し、すでに態 W. J. Goode and P. K. Hatt; Methods in Social Research, 1952. ここでは四つの妥当性の基準があげられる。

芒 C. Selltiz, M. Jahoda, M. Deutsch, and S. W. Cook; Research Methods in Social Relations, 1959 rev. ed. るものとしての測定用具の有効性の中にある」とされている。(p. 157) ととではプラグマティックな妥当性が考えられており「問題は、個人の行動ないし特質を指示するもの、あるいは予測す

of Social Classes, 1949 W. L. Warner and P. S. Lunt; The Social Life of a Modern Community, 1941. R. Centers; The Psychology

(B. J. S. Vol. 2, 1951, pp. $150 \sim 168$, pp. $230 \sim 254$) S. M. Lipset and R. Bendix, "Social Status and Social Structure,—A Re-examination of Data and Interpretation"

光をあげてらる。 F. W. Janssig and C. S. Joslyn; American Business Leaders, 1932, R. S. Lynd; Middletown なおかれらはこの論文で、マルクス主義的立場からする階級調査が、権力構造論の系列をとることを示し、次のような研

in Transition, 1937. C. W. Mills; The New Men of Power, 1949, R. Bendix; Higher Civil Servants in American

胜 8 C. W. Mills; Sociological Imagination, 1959.

パッペンハイム、近代人の疎外、粟田訳、六九頁

註7

50~75)の双力を批判し、最後に結論として前者は「形式的であいまいな開化反対主義」であり、後者は「形式的で空虚 る」としている。(p. 75) な精巧さ」をもち、共に「われわれが人間や社会について余りよく知っていないということを保証するもの と考えら れ

かれは「大理論」 (pp. 25~45) と「抽象化された経験論」 (pp.

註 9 ものというだけでなく、また無条件に証拠となる物となる。」(三〇一頁) 実というものは、もしそれらを、それらの金体、それらの関連のなかで取りあげるならば、たんに曲げることのできない レーニン「統計と社会学」(全集第二三巻)「……万事は、個々の出来事の歴史的、具体的環境にあるからである。事

(1)性」を定立しりる厳密科学の確立であった。分析的過程の精密化は、検証のための精密化であったといってよい。 に分析的過程の精密化を進めてきた数量的方法が、常に問題としてきたのは「検証」 を 通じ ての客観的な「法則 以上述べてきたところから最後に一つの問題に行きつく。すなわち「検証」と「法則性」の問題である。次第

しかしそのことの前提としてわれわれは数学的方法の基礎理論、つまり数観念の認識論的基礎をも含めて数学理

数学的操作の展開も、その限りでの有効性を志向するものであった。

腀の検討を行わなければならないであろう、だがとこではその余裕はない。ただ次のことを指摘するにとどめる。 すなわち、数量規定および数量的操作の無概念性あるいは無思想性を否定してマルクスおよびエンゲルスは数学

それを認識する主体の「存在」はいかに定められるべきか。かくして数学的操作の独り歩きによる分析的過程偏重 る「現象の結節点」を尺度として、逆に事象を数量化し、測定して行く「能動的認識」が可能となりうるであろう。 (#5) 止まるものではなく、その内部に「質的な諸区別をいっぱい詰め込んでいる」ものとして、人間が外界を数量化する(テキキ) 「量と質の相互転化」も本来の意味を持ちうるであろう。なぜならば数量規定は、単なる外的事象の外面的規定性に 量的関係とを対象にしており、したがってきわめて実在的な素材を対象にしている」のである。かくしてはじめて(fis) 思惟からの産出物ではない。数・図形という概念にしても、純粋数学にしても、「現実世界のもろもろの空間形態と それは歴史的な経験を重ねた発展の新産であり、その基礎には現実の対象世界が存在するのであって、決して純粋 定として存在し、具体的な対象からその数以外の一切の属性を捨象した結果として生み出されたものではあるが、 命題を「検証」しえたとしても、その基準となるべきプロトコル命題はいかにして存立可能であるのか。少くとも という能動的活動の結果成立すると見なされりるからである。このように考えてこそ、量と質との相互転換におけ れ関係附けられなければならぬ。との関係附けの仕方が算法である」と。しかし、たしかに数は最も純粋な量的規(誰2) ろこれを以て演算する。何となれば数は無関心的規定性であり惰性的のものであるからで、外部から活動を促がさ のみを主題とする時、すでに言葉の正しい意味における「実証」さえも失われることになる。たとえ「有意味な」 I の内部に感性的自然の存在を認め、したがってまたそとに豊かな思想性を認めているという点である。たとえばへ いてはむしろ思想性を否定した形で語る。「算術は数及びその形状を考察する。否とれを考察するのではなく、鄭 · ゲルは「数は思想ではあるが、しかし金く自己に外的な存在としての思想である」として、「算術」の段階にお との前提を無視して数学および論理学的命題の単なるトートロジーを説き、それを基礎にした形式的な言語分析

ろもろの量は、事物の「合理的連関を証明」するものである。しかしこのことは、それらの起源が先験的であるこ の結果は、 とを証明するものではなく、まさにそれらの合理的連関をのみ証明するものにすぎない。いりまでもなく他のすべ 綜合的過程への契機を自から断ち切るにいたる。たしかに「虚量」の産出と、それらによる数学上のも

現央世界から抽象された賭法則が、現実世界から分離され、なにか独立したものとして、すなわち世界がそれにの ての科学と同様に、数学もまた「人間の欲求」から発生したといいうる。ところが、「ある一定の発展段階では、 っとるべき外来の法則として、現実世界に対立させられる。」かくして逆に純粋数学が現実世界に適用されるにいた

5 る。だがそのことの意味は、いうまでもなく数学そのものが現実世界からの産出物たることを示すものに他ならな 「それはまさにこの世界からとりだされたものであり、そしてたんに世界の諸構成形態の一部分をあらわすも

のにすぎず、 ――そのゆえにとそ一般に適用可能であるわけなのだ。」 (#e)

ヘーゲル、小論理学、前掲上巻、三一四頁。

註2 いは限度)においては、質的契機と量的契機との統一における思想性が説かれている(大論理学、前掲上巻、五五三~六 ただしエングルスの指摘にもある通り(自然の弁証法、前掲下巻、一四四頁)、質的な定量としての Mass(度量ある

五七頁)。 との意味における量的変化は、単なる無思想的な増減ではない,「一般に量的変化が起る場合、それは最初そ えみる私の変化は、質的なものを捕える言わば狡智である。」(小論理学、前掲上巻、三二六頁) れ以上の意味を少しも持たないようにみえる。しかしその背後には別なものがひそんでいるのであって、一見何でもなく

注 4 エンゲルス、自然の弁証法、前掲下巻、一四三頁

エンゲルス、反デューリング論、大月版、一二一頁。

]]: 3

自然科学の事例を単純に適用することの危険を十分知った上でエンゲルスのあげている事例を解釈すれば、木が一〇〇

度に熱せられた時質的変化が生じて水蒸気に転化するというよりも、まず水が水蒸気に転化する結節点を一〇〇度として

指定し、そとから逆に尺度化して木の温度を測定するという手続きの下に数量化がおとなわれて行く、 と見なすこともで

いらまでもなく、これは自然に対する他動的な実践的認識の意義を認めようとする点で、操作主義の主張とは本質的に

一三三頁

エンゲルス、反デューリング論、

(2)分に触れることはできない。それは、 味としておとなわれなければならないからである。したがってとこではただ考え方の方向を示すにとどめたい。 ところで次に社会科学における「検証」の問題をどう考えるべきであろうか。この問題に関しても今ここで十 **論理実証主義の問題提起をも考慮しながら、社会科学方法論そのものの再吟**

れも「真理」と「真理の基準」とを同一視する誤りに陥った。そとでは、検証の結果が成功したというととと、(註し) 意味において新実証主義は、それが感覚論的理解からするものであれ、言語論 的 理解か ら するものであれ、いず 般に検証とは、仮説から法則を定立する過程において真理性の判断を下す手続きとされる。しかしての検証 検 の

理の理論から反映の過程が消失し、真理は主観の操作の《成功》にとけてむ」のである。それは「存在」との分裂(隹2) において展開される主観主義の独善的空転であろう。 誑される命題のうちに実在が十分に反映されているという事実との混同がおとなわれており、したがってまた 真

く感覚的経験を感覚要素の函数関係として数 学 的 に 記述し操作することだけにとどまろうとするマッハ主義であ る。そこでは現象形態の把握のみが目指され、その本質を追求することは意識的にも排除される。この場合、 と経験とを比較することができないときはその判断に科学的な意味を認めないとするならば、それはいうまでもな 数量的方法の主張が、もしかかる形で主観の感覚的経験と判断の一致のみが真理性の基準であると見なし、 真理 判断

性の基準は感覚的経験による検証にあるとされるのであるが、しかしその「感覚は決して客観的実在からの反映で ては、すでにレーニンの批判によって論じ尽されている。(tts) ぎないとする思惟経済説も、逆立ちをした主観主義的観念論に陥らざるをえなかった。こうしたマッハ主義につい はなく、むしろ実在は感覚の複合として主観的に構成されるものである。その意味で法則は経験の要約的記述にす

けといわなければなるまい。(註4) 過妥当なるもの、 まるところそれもまた客観的実在をわれわれの感覚の源泉と見ず、造り出された言語・記号の組み立てによって普 れ、そとに示される内容の感性的性格はいよいよ失われて、実在性は単なる認識の一形式にしかすぎなくなる。つ さらに数学的操作の一歩進展した尺度化による測定の段階においては、 そ れ が 展開される度合いが深まるにつ 社会的に組識されたもの等々としての客観的なものの概念を『導き出す』不可知論が存在するだ

程は、 され、 かなる論理的連関において果されるかという問題が残る。 ある。先にも述べたごとく、特に社会科学の法則性の樹立においては、分析的過程と綜合的過程との統合が必要と 手段としてその創造性を認めることが可能であり、かえって綜合的全体像への構想を導く契機ともなりうるもので しかし感性的外界を定着せしめるものとしての数量規定と、それに基いて展開される数学的操作による分析的過 両者は決して相反する科学方法を示す二過程ではありえないからである。ただその場合、二契機の統合はい それが綜合的過程への統合を常に正しく志向する限り、むしろ物質および社会現象の実在を確認する能動的

検証であった。すなわちそれらがいわゆる論理的領域内にとどまることからも知られるごとく、理論的思考によっ 上述の意味における検証は、すべて分析的過程をおし進めることによってもたらされる「理論的」 認識 のための

事物間 た。とのような意味における実践としての検証こそが、社会科学の法則性の検証に適用されるべきであろう。 に述べた「実験」の問題性も、 る実践の役割」が問題となるのではなく、むしろ逆に「実践過程における認識の役割」が問題となるのである。先(17) が、「実践」のための認識として、実践過程の一環として位置づけられる必要がある。そこでは「認識過程におけ 出発した言葉の正しい意味における「人間」を基礎とする限り、理論的・科 学 的 な 認識を含めての「認識」一般 問題は「実践」の問題として把握されるにいたる。しかもこの実践的認識としての検証においては、 哲学も等しく、人間の行動の人間の思考に及ぼす影響を従来全く無視してきた。これらはただ一方に自然を、他方 的な反映ではなく、対象を捉えようとする積極的活動の結果としてもたらされるものだからである。 明は人間の活動の中に、実験の中に、存する」といわなければならない。なぜならば、対象の認識は単にその受動(註5) これを行うものである。「観察の経験知だけでは決して必然性を十分には立証し得ない」のであり、「必然性の証 はなく、 け、その必然性を能動的に証明することはおこなわれなかったということができよう。単なる因果的連関の設定で て因果的連関の把握を目指す受動的な論証としての検証であった。そこでは、分析的過程の展開による諸現象・諸 される必然性こそが法則性であると把握される点で、まさに「実践」の問題を提示するものとされるところにあっ に思想を知るだけである。けれども自然だけのものとしての自然ではなく、人間による自然の変化とそまさに人間 の思考の最も本質的な、 の因果的連関は説明可能であったが、さらに綜合的過程においてそれらを「自 然 史 的 過程」の中に位置づ 「必然性」の立証によって因果性の観念を基礎づけるという意味での検証は、他ならぬ「人間の行動」が かつ最も直接的な、基礎である。」かくして人間の活動が検証を行うという時、(註6) 構想による全体的形像に対象的現実を適合せしめて行くという点で、またそこに示 「労働」から 「自然科学も 「検証」の

行為そのものに帰せられるということができる。そしてそれは決して歴史的原理を排除し、 にこのことから、社会科学の法則性の究極の検証は、 長期にわたる人間の実践的経験の蓄積すなわち人類の歴史的 「学的冷静と客観的公

平を売りものにする」科学からは導き出されえないものである。

・ナルスキー『新実証主義の真理の基準にかんする学説の批判』現代ソヴェト哲学第五集、昭和三五年。中村秀吉、 真理と検証との同一視は、新実証主義の意味論以前の段階における「検証の原理」の特徴的性格とされる。(イ・エス

実証主義とマルクス主義、昭和三六年、参照。)

ナルスキー前掲論文、三二九頁。

そ、唯物論者のフォイエルバッハ、マルクス、エンゲルスを、不可知論者(ヒューム主義者)のアヴェナリウス、マツハ という点にあるのではなく、これらの連関についてのわれわれの認識の源泉は、自然の客観的合法則性であるか、それと 連関についてのわれわれの記述がどれほど正確なものになったか、またその記述は正確な数学式で表現できるかどうか、 レーニン、唯物論と経験批判論(全集第一四巻)「哲学上の流派をわかつほんとうに重要な認識論上の問題は、 われわれの心の性質、一定のアプリオリの真理を認識する心に固有の能力などであるか、 とい ら 点にある。これと

4.レーニン、同書、一四九頁。 から決定的にわかったものである。」(一八七頁)

のか。少くとも存在的集団を統計対象とすべしとする論者からの、数学的操作の形式主義的空転という批判に対しては、 その際の帰無仮説の考え方にしても、形式論理に対してオプティミスティックな無批判的信頼を寄せるだけであってよい より基本的な次元からの回答が与えられなければなるまい。 おける第一種過誤・第二種過誤も、果して数学的操作の進展に伴う必然的帰結としての必要悪であるのかどうか。さらに なおこうした意味で、無限母集団仮説の認識論的な再吟味も、もら一度行われてしかるべきであろう。また仮説検定に

註6 同右、九二頁。 註5 エンゲルス、前掲書、下巻、九〇頁。

古田光「理論的認識と実践」(山田絹、今日の哲学「認瞭論」昭和三五年、一八七頁)。 なおこの論文で古田が、認識

に対する実践の関係を、変革的・実践的な性格と、検証的・実験的な性格との二重構造において捉え、両者の関連につい

ることを忘れてはなるまい。 て述べているととは極めて示唆に富む。しかし、検証・実験そのものの内部にも、本来変革的・実践的要素が存在してい

謎 8

戸坂润「社会科学論」(迸集第二巻「科学論」昭和二四、年一六四頁)。